

コーヒーとベトナム

—ベトナム中部高原の先住民社会とコーヒー栽培—

下 條 尚 志*

ベトナムコーヒーの嗜み

ベトナムコーヒーをご存知だろうか。もしベトナムへ旅行し、喫茶店へ寄る機会があったら、地元の人々がどのようにコーヒーを嗜んでいるのか、よく観てほしい。コーヒーを注文すると、コップの上に怪しげなアルミ製の缶がのってテーブルにやってくる。ただの安っぽい玩具だと思って退けてはいけない。これは、ベトナムコーヒー独特の風味を逃さない、特製コーヒーフィルタなのだ。

フィルタからコーヒーの液がカップの底にすべて落ちるまで、読書をしたり談笑しながら、気長に待つ。すべて落ちたことを確認したら、熱を閉じ込めていたフィルタの蓋を裏返して、フィルタに残ったコーヒーがテーブルに滴り落ちないように底に敷く。それから、コップの底に沈殿しているコンデンスミルクとコーヒーをよくかき混ぜ、コップの二分の一ほどの量の水を入れる。こうして、ベトナムコーヒー定番の“cà phê sữa đá”（アイスマルクコーヒー）が出来上がる。氷をスプーンで割って濃厚なコーヒーを薄めながら、ちびちびと飲む。これは今回の調査で学んだ、いわゆる「通」の飲み方だ。

ベトナムコーヒーに関するウンチクを少々長く書きすぎた。だが、ベトナムには「ベトナムコーヒー」と総称されるようなコーヒー豆と、地域特有の飲み方が比較的長い歴史をもって育まれてきたということをイメージしてもらいたい。そして、今回フィールドワークで訪れたベトナム中部高原の先住民社会も、コーヒー栽培と開発の歴史と根深いつながりがあるのだ。

ベトナム中部高原コントゥム省にて

なだらかな起伏のはげ山が連なる上に、田畑や植林地が疎らに点在している。そこに北の方角へ不自然なほどまっすぐに国道 14 号線が伸びている。前日、コントゥム市で知り合ったガイドのロンさんから、近郊のダックハーという町にコーヒー農園があるという話を聞いた。中部高原の先住民とコーヒー栽培の関係に興味がある私は、そのひたすら直線に続く道を、ロンさんのバイクの後ろに跨って、コーヒー農園へと向かっている。このまっすぐな道路も風景もどうも違和感がある。それは、植民地時代から今まで、先住民の土地や生活を無視して開発政策が続けられ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真1 コントゥム市内の木造教会

中部高原では民族を問わずクリスチャンが多い。

てきたせいなのだろうか。

民族誌によれば、植民地以前は、コントゥム省をはじめ中部高原には町や道路も一切なかった。鬱蒼と広がる山林地帯に、平地民のキン族が“mqi”（未開）と畏怖した先住民村落が点々とあるばかりだったようだ。しかし、フランスによる植民地化以後、コーヒーや茶、ゴム栽培などに適したこの地は、町や道路、プランテーションの開発が急ピッチで進められた。それでも外の世界との接触が少なかった先住民集落がまだ数多く残っていた。しかし、植民地時代に続くベトナム戦争は、先住民の信仰対象であるヤーン（yang）が宿る森や山々を、激しいゲリラ戦の舞台にした。ついで空から枯葉剤も散布された。戦後誕生した統一政権も「進歩」の名のもとに農業開発や森林伐採を進めた。一方でこの一連の激しい変化のなかにあっても、中部高原へのキン族の移住は絶えることなく、ついに先住民は、この地域に限ってでさえ、統計的にも“少数民族”となった。

現在、ベトナムでは外国人が少数民族研究

を行なうことを、国民統合の観点から非常に警戒している。加えて中部高原は、土地問題に端を発した先住民による暴動が近年発生しており、政府は外国人研究者を容易に立ち入らせない。この暴動には、ベトナム戦争の混乱のなか、外部者によって蹂躪された中部高原の独立を求め、戦後アメリカに移住した一部のプロテスタント系過激派が関与していた。そのため、人権団体の圧力によって制裁を受けることを恐れた政府は過剰に警戒しているというわけだ。

今回、私が中部高原コントゥム省のコーヒー農園へ政府の許可なしで行くことができたのは、ガイドのロンさんのおかげである。この恰幅の良いヤクザまがいのキン族の男は、もともと旧政権の兵士でアメリカ軍の下で働いていたにもかかわらず、コントゥム周辺の公安警察とコネをもっているらしい。網渡り的な調査であることに変わりはないが、政権の意図とは裏腹に、コネと賄賂によって行政の末端は動いており、そこにこの国の抜け道があることは間違いがなさそうだ。

あれこれと思いを廻らしていると、ずっと黙っていたロンさんが目の前の風景を指さして「コーヒー畑だ」と言った。そう声をかけられるまで全く気づいていなかったが、コーヒー畑を見るのは、恥ずかしながら生まれて初めてのことだった。人間の背丈よりやや高いコーヒーの木々には、蚕の繭のような真っ白な花が、枝に一定の間隔をあけながら咲いている。真っ青な空に対して一面に広がるコーヒー畑とそこを通り抜けている小道は、どこか懐かしさを感じさせるが、これもここ



写真2 調査を行なったコーヒー農園
どこまでも広がるコーヒー畑。

数十年の開発のなかで創られた景色なのだろうか。

農園の小道をたらたらと走っているうちに、ロンさんのバイクが白とピンク色の仰々しい建物の入り口の前で停車した。ロンさんは、その建物の前で井戸端会議をしている女性2人に声をかけ、話が済むなりそのコーヒー農園の事務所らしき建物のなかへ入るよう促した。なかに入ってしばらくすると、奥から農園の管理者らしき中年の男性が出てきた。私たちと握手を交わしロンさんが調査の旨を伝えると、その管理者はインタビューに快く応じてくれた。この農園がいつから存在し、その歴史はどのようなものであったか。もともとこの土地はどのエスニック集団の、どの村に属する土地であったのか。ただ、それだけを知ることができればよかった。しかし、農園の管理者と直接話す機会を得たので、即席の質問を手当たり次第ぶつけてみたところ、いくつかのことがわかった。

このコーヒー農園はもともと1981年に国営企業として設立され、現在ではハノイに

本社をもつ会社が経営している。従業員は約500人で全員がキン族である。この会社は約1,500 haの農園を所有し、他の会社を合わせると、この一帯のコーヒー農園は約9,000 haほどの規模がある。生産量は1 haあたり3,000 tで、インドや中国、日本、ドイツ、イギリスへ輸出している。

この数値をみると、相当な量を海外へ輸出していることになるが、これはこの国に馴染みのない人であるならば意外かもしれない。仮に日本でコーヒー豆やインスタントコーヒーを買う時、パッケージの裏に書かれている生産地は多くの場合ブラジルやコロンビアなどだ。しかし、意外にもコーヒー生産量・輸出量ともにベトナムは世界2位だそうである。しかもその多くが、ここベトナム中部高原で生産されている。この農園で使っているコーヒー豆はインスタントコーヒーでよく用いられるロブスタ種で、安価で環境適応能力が高いため大量生産が可能なのだろう。一般的にロブスタ種はその特有の苦みから、他の地域で生産されたコーヒー豆とブレンドして飲まれる。だから、日本のスーパーなどの店頭には、ベトナム産と明示したコーヒーは置かれていないというわけだ。こうして、ベトナムコーヒーの生産量は、消費者の目に見えないところで着実に増加し続けてきた。

この農園が1981年に設立され、それ以前にはコーヒー畑がなかったという説明は、予想外だった。過去の民族誌でも描かれてきたように、フランス植民地行政は、先住民の伝統的な土地制度のタブーに触れないように慣習法を成文化し、彼らの土地を「借用」とい

う名目で農園に利用した。それから、焼畑などの季節農作業や儀礼と重ならないよう巧みに先住民に農園での賦役を課した。この体制が植民地時代末期には崩れ、やがて移住してきたキン族に農園は引き継がれた。その後現在まで、先住民の土地制度と慣習法を知らないベトナムの政権や企業に農園は利用されてきた。このようなストーリーがそのまま、このコーヒー農園の事情に当てはまるものと思っていた。

しかし、この農園は事情が異なり、70年代後半から80年代前半に行なわれた国家計画の一環で「国有地」として開発が行なわれた例なのかもしれない。農園の管理者によれば、農園に住み込んで働くキン族だけが労働者として雇われているそうだ。これは平地社会で過剰となった人口を山地開発の労働力として移民させた結果なのだろうか。となれば、この地に居住していた先住民はここ30～40年の間に別の地へ移住を余儀なくされたことになる。「もともとこの土地は誰の土地だったのか？」という疑問が喉の奥まで出かかったが、もともと国営だった企業の管理者にとってこれは理解しえない質問に思えたので口を噤んだ。

ロンガーオ族とコーヒー栽培

コーヒー農園での聞き取りが終わった後、ロンさんがこの農園の近くでコーヒー栽培と焼畑を行なっているロンガーオ族の村落があると云った。先住民による世帯規模のコーヒー栽培はコントゥムでは珍しいため、その村へ向かうこととなった。広大なコーヒー畑

のなかを走っている途中、大海の無人島のように農園労働者のあばら屋があるのを見つけ、からからに乾いた喉を潤すためにそこへ立ち寄った。茶飲み話ついでに、そのキン族の労働者がどこの出身であるのか尋ねたところ、北部出身とのことであった。ということは、ベトナム南北統一以後に移住した労働者ということになる。1980年代半ばドイモイ（刷新政策）の下で市場経済化が行なわれ、移住の規制がなくなると、大量のキン族が換金作物栽培を目指して中部高原へ移住したそうだ。平地からの移民は中部高原の土地がコーヒーなどの換金作物と結びついているため、もはや途絶えることのない潮流となっている。

その後、再びバイクに跨り、1時間ほどしてようやくロンガーオ族の村落に到着した。ロンさんが言うように、確かに何軒かの家の庭先にコーヒーが栽培されていた。だが、コーヒーを栽培する家は数えるほどで、そのうち何軒かはコンクリート建ての比較的立派な家であるのに対し、栽培していない家は伝統的な高床式でもない、茅葺のあばら屋であった。おそらく、今やコーヒー栽培は先住民の生活水準を規定する指標なのだろう。しかし、いずれにしても、ダックハーの大農園に対してロンガーオ族のコーヒー栽培はあまりに貧相で、やがて消滅してしまうのではないかと思わせた。

このロンガーオ族のコーヒー栽培を見た後、ダックハーのコーヒー農園とロンガーオ族のコーヒー栽培は無縁なのだろうか、という疑問がふと湧いた。地理的な距離からいつ



写真3 ロンガーオ族のコーヒー畑をもつ家

今やコーヒー栽培は村落のなかでの権力関係を決定するひとつのステータスなのかもしれない。



写真4 ロンガーオ族のコーヒー畑をもたざる家

でも、相互の関係を疑ってみる必要はある。コーヒー農園の管理者は、1981年以前コーヒー農園はなかったと主張した。だが、かつてロンガーオ族がコーヒー栽培や焼畑を行っていた土地に、その地の利を知った政府や企業が大農園を開いた、と想像するのは、あながち妄想ではなかろう。いずれにしても、先住者に対する配慮を欠いたまま、コーヒー農園という不自然なほど均質な空間が、たった30年ばかりの間で作られたということは確かだ。

おわりに

コントゥム省の南にあたるダクラク省では、コーヒー栽培が大変に盛んで、90年代のコーヒーバブルが2000年にはじけたことによって大打撃を受けた。ダクラク省ほどの生産量はないコントゥム省だが、世帯で取り組んでいるコーヒー栽培は、価格の変動によって大きな影響を受けるに違いない。やがて、不安定な世帯規模のコーヒー栽培よりも、企業が経営する大規模なコーヒー農園

が、競争に勝ち残っていくのだろう。近年起こった先住民の暴動は、実はコーヒー価格の大暴落とも連動していたといわれている。

中部高原の先住民社会がキン族に一方的に抑圧・搾取されてきたというつもりは全くない。ただ、先住民社会のあり方を根本から揺るがし続けた直接的な要因は、多くの研究者が強調してきた植民地主義や国民国家建設過程、戦争、社会主義の影響など政治的な言説よりもむしろ、その政治的状況下のなかで急速に浸透し続けた商品経済や平地の人々の中部高原への移住の影響など経済・社会的変容にあるように思える。特にコーヒーという農作物は、植民地時代から現在まで、その経営母体や労働形態を変質させつつも、絶え間なく拡大し、一攫千金を狙う人々を魅了した。国家規模での中部高原への移住事業も行なわれてきたが、ベトナム戦争中さえフランスが放棄したコーヒー農園を求めて多くの平地の人々が自発的に中部高原へ移住した。このような人間の草の根の経済活動や生活力に畏敬の念を覚える一方で、そのなかで地域社会の

コミュニティのあり方が忘却されてきたことと、それに付随して生じてきた過去の血生臭い暴力沙汰に違和感を抱く。が、中部高原の

コーヒー栽培は、かつてのゴールドラッシュのように、開拓者を盲目にしてしまうのだろうか。

「木の人」

—植物の名前をもつ人びと—

八 塚 春 名*

タンザニアのサンダウェという人たちの村でフィールドワークを始めた頃、私のもっぱらの作業は、植物を採集し、方名と用途を尋ねることだった。「この木の名前は?」「何に使うの?」という簡単な会話でもなんとか作業ができ、毎日増えていく標本によって、目に見える形で「調査をしている」という実感が湧く。まだ言葉もろくに話せない、調査の仕方も分からない、慣れないことだらけの新米フィールドワーカーにとって、これほどやりやすい調査はなかった。毎日歩いて、植物を採集し、名前を聞く。こんなことを繰り返していたある日、ふと気付いた。友達になった女の子の名前と、採集した植物の名前が同じなのだ。そういえば、お世話になっている家のお父さんの名前も、お母さんの名前も、植物と一緒に。「そうか、かれらは植物の名前を人の名前に付けているんだ!」そう気付いた時、私ははとてつもなく大きな発見をしたかのように、うれしくて、わくわくしたことは今でもよく覚えている。

それ以降の私の植物採集は、もっぱら「あなたの名前の木はどれ?」から始まった。レバーさん、アマタさん、ゲレさん、デゲラさん、カツァワさん、ホアさん…出てくる、出てくる、植物の名前。これまでに私が聞き取れたものは、男性の名前になっているものが 25 種、女性の名前になっているものが 20 種である。もちろん例外もあって、たとえば鳥の名前や星の名前など、植物由来ではない名前をもつ人もいる。しかし村の多くの人たちは、45 種の植物の名前を共有している。男性ならゲレさん、レバーさん、デゲラさんなんて山のようにいるし、女性もカツァワさんやホアさんなんて、一家にひとりいるんじゃないかと思うくらいに多い。そしてある日私にも「テンカ」という名前が付けられた。テンカ (*tenka*: *Grewia praecox*) は、シナノキ科の木本植物で、小さくて黄色い花がたくさん咲き、全体的にこんもりした木だ。乾期の終わりから雨期の初めにかけて、小さくて、砂糖のように甘い実をつける。サンダ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

ウェにとっては典型的な女性の名前のひとつである。テンカという名前をもらったその日から、私はサンダウェの一員になれたみたいで、とにかくうれしくて、うれしくて、「私はテンカっていうの。」と方々で歩いて歩いた。しかし、村にテンカは大勢いる。だから、「私と同じだねえ。」とか、「うちの子と同じだよ。」とか言われることがしょっちゅうだった。それでも、村の人たちも私がサンダウェ語の名前をもったことを喜んでくれていたようで、私にはそれがまたうれしかった。

私のフィールドには、多幹化して幹が30本にも40本にもなる木がたくさん存在する。植生調査をする時に、幹の数を数えるのは本当に大変な作業だった。特にテンカは多幹化する植物の代表格であったから、インフォーマントやアシスタントが「テンカは子だくさ

んだねえ。40人も子どもがいるよ。きっとだんなさんは大きな畑をもっているんだろう。ハルナはこんなに子どもがいて、大変だね。」などと、幹を子どもにたとえてよく冗談を言っていた。また、アシスタントの女の子はツェゲ (*lege*) という名前をもち、それはくつつき虫のように服にくつつく種子をもつ植物と、その種子自体を指す名前なのだが、私と彼女はしばしば「ツェゲは、もう、ほんとうに鬱陶しい！あぁ、また私の服にくつついている！」と冗談を言い合ったものだ。

では、なぜ、こんなふうに必要な植物の名前をもっているのかというと、それはかれらにこんな習慣があるからだ。サンダウェは、子どもが生まれ、やがてへその緒をはがれ落ちると、それを林の木の下に置きに行く。そしてその木の名前を子どもに付ける。名付けに関しては基本的に両親や祖父母の意向が優先されるが、へその緒を置きに林に入るのは、子どもの両親ではなく祖父母やおば、または近所の人などである。男の子どもの場



写真1 隣の家の子ロボカ (*loboká: Stropharthus eminii*) 君

彼のふたりのお兄さんは、デゲラ (*degera: Dichrostachys cinerea*) 君と、センラ (*senlla: Terminalia sericea*) 君という名前。



写真2 多幹化したテンカを伐るレーバ (*lééba: Xeroderris stuhlmannii*) さん

合、バオバブのような大きな木、アカシアのようにトゲのある木が多く、女の子どもの場合、テンカのように甘い果実が実る木や、かわいらしい花が咲く木が多く用いられている。私にテンカという名前を付けてくれたふたりの友人は、ブタとカツァワという名前だが、ブタ (*buta*: *Tapiphyllum* sp.) は雨期になると青紫のかわいい花をたくさん付け、カツァワ (*k'ats'awa*: *Boscia mossambicensis*) は黄色やピンクの少し渋味のある果実を付ける。

出産時、もしくは出産後、母と子が眠るベッドのある部屋には床一面に砂が敷かれる。そして、へその緒を林に置きに行く日まで、その部屋の砂を捨ててはいけなく、掃除もしてはいけなく。また、子どもは生まれてからこの日まで、背中におぶられることはない。この日、祖母やおばは、初めて自分の孫や姪を背中におぶる、そして部屋を掃



写真3 診療所でへその緒を切ってもらった赤ちゃん
彼女は2週間後に私と同じテンカという名前になった。

く。砂とゴミは、林にもって行かれ、へその緒と一緒に木の下に置かれるのだ。Ten Raa [1966: 180]によると、この習慣は、「胎児の状態 (fetal status)」から「生きた子ども (living child)」への通過儀礼であるようだ。

余談だが、こんな習慣をもつかれらに、「私のへその緒は、木箱に入った状態で、まだ今でもお母さんが保管しているよ。」と何度か言ってみたけれど、言うたびにえらくびっくりされた。しかし、なぜ日本では子どものへその緒を保管するのか、その理由を知らない私は、「記念に…」とあいまいに答えていた。少し調べてみてわかったのだが、日本ではもともと、母と子を何ヶ月もつないでいたへその緒は、子どものお守りだと信じられていたようだ。だから、大病したら煎じて飲ませる、なんていうことも行なわれていたらしい。「記念」という説明には納得してもらえなかったけれど、「お守り」と言えば、きっとかれらも納得してくれるだろう。

さて、ここまで述べると、「では、かれらにとって自分のへその緒が置かれた木は特別な存在なのだろう」と、思われるかもしれない。実際、私もそんなことを期待していた。しかし、へその緒の持ち主である本人は、まだ右も左もどこか何かもわからない赤ん坊である。また、両親がその場に居合わせることはないので、両親も実際にどこのどの木の下に自分の子どものへその緒が置かれたのか、知らないことが多い。つまり、かれらは自分のへその緒が置かれた木の種類は当然知っているものの、「その木」自体を知らないのだ。同様に自分の名前になっている木に

ついても、特別に親近感をもっているわけでもない。

では、サンダウエは植物とあまり密なつきあいをしていないのか、といえば、そうではない。かれらは薬、調理具、猟具などをはじめ、さまざまなものを、植物を材料にして自分たちで作る。また、食用になる植物も多く、毎日のようになんらかの野生植物や半栽培植物が食卓に並ぶ。バオバブ (*Adansonia digitata*) ひとつをとってみても、葉はおかずへ、実はおやつやジュースへ、内樹皮はほうきやハンティングネットへ、種子は砕いて調味料へ、さらに殻は容器へと、1種の植物が実に多様に用いられている。しかし、新米フィールドワーカーであった私にとって、物質文化や食事など目に見える植物利用がどんなに豊富でも、かれらが自分の「その木」を知らないという事実は、大発見を非常にしょんぼりしたものに変わってしまったようで、ショックだった。

でも、今はこう思う。たった1本の自分



写真4 夕食のためにバオバブの葉を選別

にとって特別な木との関係ではなく、村を造るすべての植物との間に自然に築いてきた関係。これこそが、大切なことである。だから、たった1本の木の特別さなんて、かれらにとっては小さなことなのかもしれない。自分の「その木」は、もしかしたら誰かによって伐られてしまったかもしれない。もしかしたら朽ちたかもしれない。しかし、そんなことはたいしたことではないのだ。1本の特別なテンカが失われたとしてもそれは大変なことではない。しかし、もし村を造る植物の中から、テンカという種類がなくなってしまったとしたら、それはかれらにとって、「あたりまえ」であったことが壊れるとても大変なことなのだ。自分の身近な距離にテンカがあると、無意識的に認識していることこそが「あたりまえ」であり大切なことなのだ。

植物に囲まれて、自然を十分理解して生活してきたかれらだからこそ、築けるこの関係に、自然と距離を隔てた付き合いしかしてこなかった私は、気付くことができなかったのである。

木にまつわるこのような名付けの習慣をもち、木について非常に詳しいサンダウエの人びとは自らを「木の人 (*watu wa miti*)」と表現することがある。自分たちをそう表現する時、かれらの顔は自信と誇りに満ちている。私はそんなかれらに憧れ、少しでも近づきたい、という思いから、今もフィールドワークを続けている。近年、サンダウエの村では県政府やNGOなどによって換金作物の栽培が推奨されている。また、村に中学校が



写真5 バオバブの内樹皮で作る酒を絞る道具（左）とハンティングネット（右）

開校し、子どもたちの多くが進学できるようになったことにより、多くの世帯で多額の学費が必要になっている。このような現状の中、今後、村にはますます畑が増えていくかもしれない。しかし、たとえどんなに換金作物を栽培するようになったとしても、どんなに新しいものがたくさん入ってきたとしても、「木の人」が「あたりまえ」にしている植物との関係を壊す日が来るとは私には思えない。今後、かれらの社会がどのように変化したとしても、自分たちは「木の人」だと自

信をもって誇り続けられるかれらでいて欲しい。

『木の人』はカッコいい。」私は声を大にしてかれらに伝えていきたい。

本稿は、筆者が所属するNPO法人アフリック・アフリカのホームページに掲載したエッセイを、大幅に加筆、修正したものである。

引用文献

Ten Raa, E. 1966. Geographical Names in South-Eastern Sandawe, *Journal of African Languages* 5: 175-207.

森の声と村の音

片岡美和*

「夜が明けるよ」夜明けを告げる鳥の声で目が覚める。「はいはい」調査に行く時間だ。家のお母さんはもう起きていて、お湯

を沸かし、米を炊く準備をしている。熱帯といっても標高 800m にある村の朝は冷える。薪の火で暖まりながら、甘いコーヒーと揚げ

バナナをお腹に入れたら、調査に出発だ。

私はインドネシア西ジャワ州の熱帯山地林で、鳥と農業の調査をしている。国立公園に隣接する村で、原生林と集落を行き来しながら、人為的環境と周辺の鳥類相の関係を調べている。調査中に、思いがけない動物との対面に興奮し、人の出会いが身にしみる。それがフィールドの醍醐味だ。

まだ暗い空に家々の煙が立ちのぼる集落から少し歩くと、薄桃色の空、ひんやりした空気、そして起き出した鳥の声の世界に入る。夜が明けると、鳥たちのさえずりがいっそうふくらむ。起き出した鳥は枝にとまり、朝露で濡れた羽をつくろう。身支度がすんだ鳥が餌を探しに出かけると、しばらく静かになる。

イスラム教を信仰している住民たちの村では、特に金曜日の朝が静かだ。そんな時は、本当に時間が止まって、その場所にひとり取り残されたのではないかと思う。乾期の終わりに咲く真っ赤な花が、明るくなりかけた空に浮かんでいた。

村の周りの二次林では、暗いうちからサトウヤシの樹液を取っていた顔見知りのおじさんたちに出会う。「おはようさん、今日も早いね。」二次林でみられる鳥を記録していると、山に行くおじさんたちに追い抜かれる。「お先に」「おじさん今日はどこへいくの?」焼畑へ、薪を集めに、狩猟に、答えはさまざままで、いつも犬を連れている。

棚田の脇に建てられた小屋に住んでいる老

人がいる。早朝に集めたサトウヤシの樹液を、もう煮詰めている。彼の歌う民謡は、樹液の甘い香りと一緒になって、あたたかくなり始めた空気にゆらめく。

顔見知りの人や鳥に出会う二次林に比べて、村から遠ざかった原生林の中は静かだ。原生林では、二次林ほど頻繁にそして間近に、鳥や動物に出会うことはない。森には、動物の隠れ場所となる樹冠や下層植生が豊富で、鳥の餌場も限られていないため、遭遇率が低い。

原生林の静けさには二種類ある。動物の動きには、鳥や哺乳類に限らず一定の流れがあるようで、別の場所に餌を探しに行っている場合は静かで、気配さえ感じられない。一方で、静けさの中に、何かが起こりそうな気配を感じる場合がある。何かが起こる気配を秘めた「しーん」という音を感じるとゾクッ、鳥肌が立つ。そしてワクワクする。

鳥を探す時は、耳を澄まし、全身の感覚から「音」と「音の気配」をたぐる。何度も決まった場所に通っていると、鳥が出てくる順番と場所はだいたい予想がつくが、時折予想しない瞬間が訪れる。その予兆が「音の気配」だ。

遠くから、鳥と動物のざわめきを感じた。「やった! ついてる!」

気配を感じたら、鳥の通り道を予測し、間合いに気をつけ、息をひそめて待たねばならない。この一瞬を逃したら、次はいつ会えるかわからない。そんな私の緊張感を知って

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真1 家族の一日を支えるかまど

か、知らずか、鳥の混群がやってきた。一番手に飛ぶ鳥、その鳥に続いて葉の中をつつきまわす鳥、前の鳥の落とした昆虫を拾う鳥、緑の樹冠に、色とりどりの羽と鳴き声が踊る。見とれている暇はない。一度に十種類前後、何十羽もの鳥が通る、その瞬間にメンバーの種類と行動を書き留める。鳥と出会うかどうかの勝負は午前中に決まるので、帰り道は比較的楽だ。正午近くの森には、セミの声だけが響く。

「トントントントン…」お母さんたちがコメについて脱穀している音が聞こえ始めると、村が見えた。朝飯を食べていない私はもう、ふらふらだ。

道にいきなり、牛に乗った少年と牛5頭が、二次林から飛び出した。一瞬だった。つむじ風のように私を置き去りにして、ケラケラ笑い声とともに斜面の下に消えた。破れたズボンをはいた小さい子どもが、あとからつけてけと走る。驚いて吹き出す。微笑ましい光景と、少年のつむじ風で、疲れが軽くなった。

家に着くといつもご飯が用意してある。つ



写真2 サトウヤシの樹液を夜明けと夕暮れの2回集める

いさっきまで、鳥の声に耳を澄ませ、風で木々が揺れる音に驚いたりしながら、動物と植物と風の世界にいたのが嘘のように、ひんやりした家の中でご飯に夢中になる。

「森をひとりで歩いて怖くないのか」と聞かれるたびに、「怖くないよ、悪い人間に会う方が怖いよ」と答えて笑われる。本当は、森の奥にひとりぼっちでいると、怖くなる時がある。

そんな時に私を勇気づけてくれるのは、鳥や動物との遭遇と、計りしれぬ村の人びとの気づかいなのだ。

森に入り、自然と一体になれるとき、ジャワテナガザル、サイチョウやヤマネコといった人間の気配に敏感な動物を、間近で見ることができる。初めての調査の時、最後の調査の時、落ち込んでいる時、不思議なことに、その瞬間は突然、ご褒美のように与えられる。「ひとりじゃないよ」「またおいで」と語りかける森の声に励まされる。

滞在先の家族は、「今日はどのルートに行くのか」「風が強くなったら無理をせずに帰って来なさい」と気にかけてくれ、棚田や畑で働く住民は「休憩していきなよー」と声をかけてくれる。ひとりで調査が続けられるのは、初めての調査の時以来、私を受け入れ、家で心配してくれているお母さんやお父さんがいればこそだ。

調査を始めてから3年のうちに、景観が大きく変わった村もあれば、あまり変わらな

い村もあった。目に見える変化のスピードはそれぞれであるが、その速度は予想よりも早い。今度行った時に、またいつもの光景や、顔なじみの人たちに会えるだろうか。私を迎えてくれる動物たちは健在だろうか。森は私に語りかけてくれるだろうか。

目をつぶって耳を澄ませば、西ジャワの山奥から森の声と村の音が聞こえてくる。

移動する人々との関わりから生まれた「故郷」

伊藤千尋*

ザンビアの農村で調査をしながら暮らしていたとき、私は有名人になった気分だった。どこを歩いても、近くから、遠くから私の名前を呼ぶ声がしてその先には村の人々が笑顔で手を振っている。

私が初めて調査村（ハバンバ村）に来たのは、まだ乾季で気温が穏やかな8月下旬だった。ザンビア南部州、国内でも干ばつが頻繁におこる地域として知られているところだ。私は農村の人々が生業をどのように組み合わせているか、そして特に出稼ぎ労働が村の人々の生活、とりわけ経済にどのような影響を与えているかを研究のテーマにし村に入った。これはそのときに私の心の中で生まれてきた調査村に対する「故郷」の意識の話だ。

ハバンバ村との出会い

ハバンバ村の多くの人にとって、私は「初めて見る身近な白人」であった。そのため村に入った当初は、ハバンバ村だけでなく隣村からも、私を見ようと色々な人が訪ねてきた。初めのころは、私が歩いていると挨拶や質問の嵐で、現地の言葉を話そうとする私をおもしろがったり、からかったりする人もいた。このときが初めてのアフリカ滞在だった私は、村の人々とのこうしたやりとり、視線に疲れを感じずにはいられなかった。到着して間もない頃は気づかなかったが、村の人々が、初めて見る外国人に不安や好奇心という感情を抱くことは自然のことだった。そのことに気がついてからは心が楽になり、8ヵ月

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真1 調査村一帯の様子

到着した当初は雨季になっても農業ができるのかという不安を抱かせるような風景が広がっていた。

も滞在するのだからそのうち慣れていくだろうと本来の楽観的な性格を取り戻していた。

私の予想どおり、時間が経つにつれて、また彼らと日常をともにするにつれて私がいることに村の人は慣れていった。しかし、そんな中でも、初めから私との壁を感じさせない接し方をしてくれる人がいた。それは一緒に暮らしていたナナ (Nana) という女の子と、隣の家に住んでいたギレ (Gile) という少女だ。

ナナの父親は私が滞在していた村の村長で、私はその一家と一緒に暮らしていた。ナナと最初に出会ったとき、日本でも聞き覚えがあるこの名前と彼女の笑顔にとっても親近感を抱いたのを覚えている。彼女は10人兄弟の下から3番目で当時は6歳だった。彼女はまだ幼い末の妹に母親がかかりっきりなのに不満を抱いてすねていたり、お腹がすくと機嫌が悪くなったり、怒られると泣きわめいているのにちらりと様子を伺ったり、とても正直でわがままで、感情がわかりやすく、見



写真2 レンガ作りを手伝うナナ

ていると自分の子どもの頃を思い出すかのような子だった。

ギレはナナと対照的に、8歳という年齢にしてはとても大人びていて、私が村で一番美人だと思う少女だった。母親と長男、ギレ、そして双子の弟が2組いる家族だ。ギレは末の双子を背中と前にひとりずつ抱え、彼らの面倒、食事や洗濯の手伝いにいたるまで母親ひとりの家庭を支えていた。ギレー家は私と村長一家が暮らすコンパウンドの隣に住んでいた。

私は夜になると、食事の後に外で家族と会話をしていた。会話といっても私が話すことのできる言葉はまだ限られていたので、大半は聞くことになる。そこにギレがやってきて、「Sobane」と言う。Sobaneとはトンガ語で遊ぶという意味だ。なんとなく「あそぶ」という音の感覚に近いこともあって、すぐに覚え、好きな単語のひとつになっていた。彼女たちの遊びはたくさんあって、私が一番驚いたのは日本の遊びとの共通点もあったことだ。たとえば、何人かで円をつくって座り、ひとりがその外側を歌いながら歩き、ペット

ボトルや布などを誰かの後ろに落とす。落とされた人は気づいたら、外側の人を追いかけてタッチする。「ハンカチ落としでしょ?!」とこのルールを聞かされたとき、私は思わず日本語で言ってしまった。まさかアフリカでハンカチ落としをやることになるとは思っていなかった私は嬉しくなり、6歳や8歳の友達と一緒に本気で楽しんでた。

会話をほとんどしなくても、次第にナナとギレは村の中で私が最も心を許す存在になっていた。日本にいてもとりわけ人づきあいが得意とはいえない私も、彼女たちがいたおかげで、周りの人々との関係が次第に近く感じられるようになった。

農村で暮らすこと

出稼ぎ労働の調査を始めたのは10月、雨が降り始める前の一年で最も暑い季節だ。初めのインタビューでハバンバ村の人々の出稼ぎ労働の経験を聞いていたので、経験者にその場所や職種、期間などを個別に質問していった。

移動に関するインタビューは思い出してもらおうのも、聞きたい情報を取り出すのもなかなか大変で時間のかかる作業だった。数年の間に行った人は比較的記憶が鮮明だが、十数年前になると年代を思い出すのに、子どもの生まれた年や結婚した年などこちらが知っている情報を出して、それより後だったか、前だったかと一緒になって考えた。その時の状況を奥さんと子どもを交えてみんなで思い出した。幸いだったのは、ほとんどの人が協力的で、時間を惜しまず自らの経験を私に聞か

せてくれたことだった。

「出稼ぎ労働」という言葉は、普通都市で半年や1年ほどの短期間働き、農村に帰ってくることを指している。インタビューの結果も確かに半数ほどは1年以内の事例だったが、その一方で5年以上都市に滞在して村に戻ってきている人々がいたのも事実だった。これをなんと呼べばいいのだろうか、と私は戸惑った。出稼ぎ労働と呼ぶには期間が長いような気がしていた。しかし同時に村に帰ってくるという彼らの意志と行為、そして現在村の成員として暮らす彼らには、「移住」という言葉も当てはまらないのではとも考えた。

さらに私が不思議だと思ったのは、「干ばつがなければ出稼ぎには行きたくない」という多くの人の言葉だった。この地域は頻繁に干ばつがおこっているため、乾季のたびに出稼ぎに行くことや、移住という選択肢も十分考えられた。しかし、返ってきたものの多くはこの回答だった。

数十年都市にいてもまた農村に帰ってくるというのはどういう意味なのか。

人々を村に繋ぎとめるものは、何か。

出稼ぎ労働のデータが集まってきても、私にはその答えがまだ見えない気がしていた。

都市での経験

調査も後半に差しかかり、帰国まであと2ヵ月と迫った1月に、私は都市での調査を行なうことになった。得られた情報をまとめていくと、村の人々が最もよく行く出稼ぎ先の都市が1時間ほどで行ける場所であるこ

とがわかったのだ。シアボンガという湖岸にあるその都市は治安も良いため、調査助手を引き受けてくれた友達と一緒に出稼ぎに行っている人を追いかけることにした。実際に都市で彼らがどのように暮らしているかを見聞きできることはもちろんだが、村での生活に少し飽きていた私は、久々に都市に長く滞在することも楽しみのひとつであった。

シアボンガは都市というよりは町という言葉がぴったりな人口 1 万人弱の静かなところだ。カリバ湖を利用した漁業が主産業であるが、最近では観光業が栄え白人観光客や都市に住むザンビア人などが休暇でやってくるようになった。

ハバンバ村から出稼ぎに来て、現在シアボンガに滞在していたのは全部で 9 人だった。まず彼らの家を訪ね、インタビューのお願いと日程について話した。もちろん初対面なのだが、村の家族や親戚を知っている私は彼らに初めて会った気がしなかった。初めのうち彼らは私がなぜ自分たちの所に訪ねてきたのか驚いている様子だったが、私がハバンバ村に 8 月から滞在していること、調査の内容などを伝え、彼らの家族や村にいる共通の友人の話をするうちに緊張がほぐれていった。

都市での生活の様子や、現在までの職歴、シアボンガでの人との繋がりなどを聞いていると、出稼ぎ労働に行った人は村に戻る時期がなぜ曖昧なのか少しわかってきた。彼らの間では仕事を人づてに探したり、職場で出会った人に誘われて他の都市へ移動したりということがよく起こる。都市での新しい出会いや就職の機会によって、村を出た当初想定



写真 3 シアボンガ

出稼ぎ労働者が暮らすコンパウンドからはカリバ湖が見渡せる。

していた期間よりも長くなることがあるのだ。このことから、私は都市で過ごす期間が 1 年であろうと数年になろうとも、彼らにとっては出稼ぎ労働の延長線上にある移動なのではないだろうか、と考えた。そのために長い期間を都市で過ごしたとしても、農村に帰るといふ出稼ぎの最終的な形態が残っているのかもしれない。

では、人はなぜその場所に戻るのだろうか。この疑問に小さな糸口を見出してくれたのは、都市での調査ではなく、私自身が都市で過ごしたことだった。

調査を始めて 1 週間ほど過ぎたとき、私は毎日シアボンガにすることに違和感を覚えるようになった。都市での暮らしや、都市に住む人々の価値観に触れることを楽しんでいたのは事実だったが、自分のいるべき場所ではないといった違和感だった。そして都市で出会った人々に、村の家族や友人たち、毎日の生活の話をしていると、その場所に住んでいたことをとても誇らしいと感じる自分に気

がついたのである。

私は以前日本でも、自分が高校や大学時代に地元から離れた場所に毎日通っていたとき、同じことを思ったことがある。自分の故郷を離れるにしたがって、その場所を客観的にみることができ、それまではわからなかった良さがみえてくる。そして元いた場所から離れる距離が遠くなるほど、自分が場所を見直す範囲は広がっている。

出稼ぎ労働に行って村に戻ってきた人も同じようなことを感じなかっただろうか。故郷という、その中にいるときは無意識的な場所を意識化することが、村に帰るという行為に影響しているのではないだろうかと考えた。

そんな考えを巡らせながらも、調査は無事終了し、私はわくわくして村に戻った。すると、家までの道のりで私に気づいたたくさんの友人が、「どこに行っていたのだ?」「帰ってこないかと思った。」などと挨拶にかけよってきた。彼らとも話したかったが、まず家族に帰ってきたことを知らせたかった私

は、挨拶も早々にして家路を急いだ。私が家の敷地内に入ろうとした瞬間、ナナが私に気づき、「Chihiro!!」と叫んでかけよってきた。私は一瞬なぜか涙が出そうになったが、ナナとその後ろにいた家族を見てほっとした。

人が空間に愛着を感じ、帰るべき場所だと感じるのには、人、そして人との関係がひとつの要素になっているように思える。私にとってはナナやギレとの遊びの中で、家族と毎日を過ごす中で、インタビューをして村の人と関わる中で築いてきた人との関係だ。これはなにもアフリカに限ったことではない。日本でもどこにいてもそうなのだと思う。ただその関係を築けるか、それに気づくことができるかの違いだ。

普段から何気ないけれど緊密な社会関係の中で築かれている彼らの故郷は、私にとっても「故郷」になるのだろうか。また、彼らにとっても私がその場所をつくっている一員として思われたいと願い、またフィールドへと向かうのである。